シンポジウム

日韓国交正常化60周年と在日コリアン

―本国志向・在日志向再考 -21 世紀在日コリアンのアイデンティティを考える―

承認の政治から関係の創造へ

伊地知紀子（大阪公立大学）

はじめに

・自己紹介

こんにちは。大阪公立大学所属の伊地知紀子です。今回のシンポジウムの登壇者の中で、「基調報告」として「この間の在日コリアン社会の変化と課題について提起する」担当です。私自身は、確認できる限りでコリアン・ルーツがない日本人です。21 歳の時に初めて「在日朝鮮人」という言葉に出会って以来、今まで学び続けてきた研究者として、本シンポジウムのテーマについて、登壇者でお越しくださる文良淑さん、徐台教さん、全辰隆さんにお尋ねしてみたいことを、以下に記したいと思います。普段、朝鮮半島全体をルーツとする人びとについて「在日朝鮮人」という表記も用いますが、ここでは、本シンポジウムのタイトルにある「在日コリアン」を以下で用います。

私は学生時代のヨーロッパへの留学や南京大虐殺の跡地への旅をきっかけとして、日本の東アジアに対する植民地支配のことについて考えるようになりました。大学卒業を間近に控えていて具体的に何をテーマに卒業論文書こうかと思ったときに、ある教授に勧められて在日コリアンの歴史を学び始めました。当時、書店に並んでいる在日コリアン関係の書籍の執筆者は男ばかり、文章に登場するのは男ばかりで、差別撤廃運動を闘うのも男ばかりで女の姿がみえないのです。つまり、表舞台に出てくる人が男ばかりでした。私は人の話を聞くのが好きで、多くの方々の助けをいただきながら、生活史という調査方法を主に用いて、まずは在日コリアン一世の女性の生活史調査から始めました。大阪市生野区にある識字教室・オモニハッキョに通うなかで済州島出身の方に出会い、韓国済州大学校に在籍しながら済州島の漁村に住み込んで 2 年間フィールドワークをした後、現在まで約 30 年の間、済州島と大阪の関係史をベースに在日済州人の生活世界を主として調査研究を続けています。

ここに至るまで、多くの方々の生活史を伺い学ぶなかで、在日コリアンについての言論が定型化されてきたことにより、様々な有り様が取りこぼされてきたことについてどのように考えればよいのか、悩むようになりました。定型化というのは、「あるべき」造形を目指す姿勢といってよいでしょう。これは、在日コリアンの歴史の中で、何よりも優先される時代があったと考えています。日本社会での差別と排除の壁の厚さ、朝鮮半島の南北分断の影響に、結集体として向き合う必要がいかに強かったのかということは、文献や生活史を聞くなかで学んできました。ですので、日本と朝鮮半島の近現代を考えるときに、戦争責任について、歴史記述において、加害と被害の主体をはっきり分けて議論することは必要不可欠であると考えています。在日コリアンが存在する歴史的文脈は、その中から形成されているからです。

在日コリアンについての定型化の指標は、言葉がどの程度習得できているのか、歴史や文化をどれくらいわかっているのか、名前の用い方などさまざまに語られてきました。本シンポジウムのタイトルにある「本国志向」の「本国」というタームも、これに関するも

のです。在日コリアン個々人にとって「本国」とは何でどのような意味を持つのか、そもそも「本国」というタームが個々人にフィットするのか、そういったことも問いの一つです。この点については、本シンポジウムの登壇者皆さんから、それぞれにお話を伺えればと思います。一人の人間に一つの主体を統一的かつ連続的に設定して未来を議論できるのか、議論の枠組みそのものを改めて丁寧に考えて直してみてはどうだろうかと思いました。本シンポジウムのキーワードは「本国」、「在日」、「アイデンティティ」であり、これらを再考し 21 世紀を考える場ですので、明確な区分を打ち立て目指すべき像を直ちに築くよりも、現実の複雑性から議論を展開してはどうだろうか、というのが私からの提案です。そこで、いくつかの複雑性について、私からは主に日本で学ぶなかでいくつか疑問に思うようになった点をお伝えしたいと思います。

１.「境界人　ミツキ」：焦点化される物語・後景となる物語

日本に在住する住民の国籍あるいはルーツは年々多様化してきました。「在日外国人」「在日ブラジル人」「在日ベトナム人」といった表記も用いられるようになってはいますが、日本において「在日」といえば、いつの間にか「在日コリアン」を指すようになってきています。近年、英文ジャーナルや国際学会では、ローマ字による「Zainichi」という表記は在日コリアンを指します。この「在日コリアン」に該当する人は誰なのかについては、長い議論の歴史があります。国籍、本籍地、在住歴、在留資格、アイデンティティなど、時代とともにその規定条件の候補数は増えてきました。こうした変化の中、「在日コリアン」とはどのような存在なのか説明する場合、どこまで遡っても「コリアン」ルーツのみ有する人と定義することが困難であることは、あえて説明する必要はないでしょう。

2025 年 4 月 3 日、韓国 KBS ドキュメンタリー『境界人　ミツキ』が放映されました。主人公は、日本人の父親と在日コリアン 3 世の母親を持つ金原光希さんです。ミツキさんは、かつてダブル、最近ではミックス・ルーツと呼ばれる存在です。ミツキさんの母親は、自身の父親が家族で日本国籍を取得した際に日本国籍となっています。ですので、ミツキさんは日本国籍の両親を持ち、日本と朝鮮半島の双方にルーツを有する人です。このドキュメンタリーは、ミツキさんがもう一つのルーツ地である韓国済州道の大学に入学するまで、さらに済州で母方の親戚探しをする姿が描かれています。ご縁があり、私が彼女の親戚探しを手伝いました。母方祖父の母の本籍地が、たまたま私の長年のフィールドワークの村であったことから、すぐに母方祖父の父母それぞれにつながる人たちを見つけることができました。ミツキさんの母方祖父は、「伝説の芸人」ともいわれたマルセ太郎さんです。このドキュメンタリーは、ミツキさんが「コリアン」としてのルーツを探す旅として構成されていますが、そのなかで自身のルーツである日本人としての加害の歴史と在日コリアンとしての被害の歴史双方に向き合うのだと語る場面があります。それはただ「呟き」として拾われているだけで、焦点化されるのはルーツ探しの恒例の枠組みである「コリアン」の側面であって、「日本」の側面は後景に置かれたまま、特段展開されることはありません。

近年、韓国では「在日」に関心が高まっており、このKBSの企画のような番組制作だけではなく、在日コリアンについての調査研究や研究機関の設置、プロジェクトも散見されます。私の場合は、済州での調査研究が長いので、在日済州人に関することに偏りますが、済州では行政が政治的資源に活用するケースも増えてきています。現在の済州道知事が、道庁職員を大阪に派遣し、済州に本籍のある高齢者に3万円ずつ手渡しで配布し、その様子を動画に収め、都合の悪い発言は字幕をつけず済州の民放で流し続けています。韓国社会からの在日コリアンへの眼差しも、変化が見られる部分と見られない部分があるでしょう。韓国都合で在日コリアン像が構築されていく一方で、ミツキのルーツ探しは、「本国志向」「在日志向」という分け方では区切れない存在による行為として捉えることにより、どのような議論が可能でしょうか。

２．在日コリアンは「消える存在」なのか

現実の複雑性とは、ミツキさんのドキュメンターの中で呟かれた、「自身が抱える加害と被害の両側面」とどのように向き合えるのか、まさにこの問いによって表されます。彼女が自身を表現するにあたり、現時点でぴったりだと思った「境界人」の「境界」とは何と何の境界を指すのでしょうか。自身につながる先代の土地とする場合、国民国家の領土、先代についての記録のある地域、地域の中のローカルエリアなど、幾重にも設定可能です。国民国家を基礎とする国籍とする場合、当該個人の国籍自体がさまざまな経緯で変更された文脈が見えなくなります。

私は、これまで在日コリアンについて多くの人から生活史を聞きながら、このカテゴリーを成立させるものは何なのか考えてきましたが、学べば学ぶほどその「境界」が立ち上がる様は複雑になりました。そのうちのいくつかの点について、お伝えしたいと思います。

（1）特別永住ではない人びと

まずは、在留資格から見る「境界」についてです。長年、在日コリアンを規定する指標となってきた特別永住者数は減少する一方です。日本の在日外国籍者数について法務省の統計によれば、2024年6月末現在「韓国・朝鮮」籍者数は43万4,799人であり、そのうち歴史的経緯を有する特別永住者は27万7,664人です。この数字から、在日コリアンは「消える存在」だという見方があります。ただ、その見方は、30年前、私が在日コリアンについて学び始めた頃からありました。「このままでは、日本国籍になる人が増え、在日コリアンは消えて日本社会に同化してしまう」という見立てでした。このような定型化された在日コリアン言説のパターンはいくつもあります。

21世紀に入る頃からは、アイデンティティについての調査研究・言論が増えてきました。それ以前は、政治的課題・制度的差別といったハードな社会の壁に立ち向かう結集体としての言論形成と組織活動が重要な時代でした。その時代の言論の中でも、名前の名乗りや言葉の習得などと共に、「在日コリアン」としてどう生きるのかというテーマがありました。その場合、２世として、３世としてとい

う世代設定による発話がポピュラーでした。これら定型的な言論の流れとして、日本社会のマジョリティが何ら対応をしないなか、民族差別撤廃運動が多くの壁を砕いてきたなかで、マイノリティとしての在日コリアンの文化やアイデンティティに焦点が当てられるようになったというテーマの変化は、アカデミアでも共有されています。

こうした定型化された在日コリアン言説を学びながら、私は、学部卒業論文で在日コリアンの帰化をテーマに書いたときに、帰化をした方々が、自分たちは民族団体から受け入れられない、と当時言っていたことが引っかかっていました。今では、日本国籍を持つ在日コリアンであることを明示し、社会的発信をしている人がいろんな場面で活躍しています。

また、済州から大阪への移動の経験を長年聞くなかで、定型化された在日コリアン像に収まらない人びとに数多く出会いました。特別永住者ではない人びとです。個人であるいはグループで生活史を聞いた 100 名ほどのうち、3 分の 2 ほどは「密航」で来日した人びとでした。これらの人びとの在留資格は多様です。一般永住が最も多く、父母双方が一般永住であれば子も一般永住になります。同じ在日コリアン 3 世、本籍地は済州、国籍は韓国、というところまで同じで「在日コリアン」同士として話をしていても、日常生活での処遇の違いがあります。例えば、一般永住者の子孫であれば「外国人雇用状況届出」の対象になります。他にも、日本国籍者と婚姻した場合の一般永住者とその子という組み合わせもあります。さらに、日本の敗戦／朝鮮の解放前に渡日したグループを 1 世とし、2 世、3 世と世代論を展開することにも疑問を持つようになりました。合法的入国の方のお話を聞く中で、婚姻を契機として来日した女性たちがいます。婚姻相手の在日コリアン男性が、特別永住者 2 世である場合、女性は渡日 1 世で永住資格は異なります。その次世代は、自身をどのように捉え語るのだろうか、と思ったからです。

ただ、私自身、こうしたいろんな疑問を持ちつつ、なかでも「密航」の話を数多く聞きながらも、一つのテーマとしてまとまった論文にまとめるには随分時間がかかりました。お話しをしてくださった当事者の方にとって、自身が「密航」で来日したことを公表することを憚ったり、迷ったりする姿に向き合っていたからです。私がグループでインタビューした方の「密航」経験を公刊するようになったのは、21 世紀に入る頃でした。近年、「密航」は在日コリアンをテーマにする調査研究が増えていますが、ようやく公表可能な時代に入ったということでもあるでしょう。そこで今、特別永住者を基本として定型化された在日コリアン言説に入れられなかった人びとを含めた在日コリアン像は、どのように語ることができるのでしょうか。

（2）存在の複数性をどう語るのか

前述でご紹介したミツキのようなミックス・ルーツであることや、在留資格が多様であること、世代を父母どちらから数えるのかといったジェンダー的視点などについて、定型化された在日コリアン言説はどのように対応できるでしょうか。アイデンティティを論じるにあたり、自身が「在日コリアン」と名乗れば「在日コリアン」である、と定義する論文もあります。私自身も、他の表現を考え出せず、そのように注意書きをしてきた一人です。本人が定義した

カテゴリーで生きている時点において、そのアイデンティティを尊重して表現することは当然です。そのことと、その一人の人間を構成する歴史的文脈の複雑さを、ある一面に集約することは別だという疑問は、前述のようにずっと持っていましたが、このこと自体をどう問えばよいのか長い間わかりませんでした。共有できるカテゴリーは必要ですが、「あるべき」姿を求められると、自ずと個別性が削ぎ落とされるからです。

1990 年代も末、ある研究会で、日本国籍を取得する「韓国・朝鮮籍」者の増加は日本への同化傾向を示している、という「危機感」が話題になったことがありました。この時に、日本人の父親と在日コリアン 2 世で日本国籍の母親を持つ私の友人がこう問いかけました。「同化してしまうという人は、人間の中に同化するものを生まれながらに持っていると考えていると思います。けれども、私のように２つのルーツを合わせ持つ場合はどう考えることができるでしょうか」。その場で、この問いへの応答はありませんでした。思いがけない問い掛けだったのかもしれませんが、この時、カテゴリーの構成を一人ひとりの身体のありようから問い直す必要性を強く感じました。この時の友人による問いを構成するルーツは、日本人とコリアンです。

私の別の友人はさらに別の問い方を教えてくれました。彼女は、日本人の父親と 1980 年代に来日した韓国人の母親を持つ人です。彼女の問いは、「自分は在日コリアンの範囲に入るのだろうか」というものでした。加えて、被差別部落出身という父のルーツは、日本人とコリアンの親という組み合わせだけでは区切りきれない「境界」を示しています。石純姫さんの研究によって取り上げられた、朝鮮人とアイヌの関係も同様な問いを提示しているといえるでしょう。沖縄現代史における朝鮮人を捉えようとする呉世宗さんの研究もこうした流れに接続できると思います。これらは、ルーツにおける位階化の問題といえるでしょう。

加えて、ルーツ設定のスケールの問題もあります。私は、大阪で長く調査研究をしてきています。在日コリアンについて、大阪の地域史のなかで論述する際、参照すべき表記として「在阪朝鮮人」があります。大阪に在住するコリアンを指す用語ですが、近年この表記が書名・論文名に含まれることはほぼ見られず、また文章においても同様です。在日コリアンと冠した論述の調査研究対象が大阪であっても、表題には「在日コリアン」が用いられる傾向にあります（私自身も同様です）。大阪の歴史を記述する文章の中で、「在阪朝鮮人」という表記が頻出するのは、一九二〇年代、朝鮮半島および済州島（以下、朝鮮地域）からの来阪者が急増した時期です。この時期、在阪朝鮮人は「社会問題」と看做された上で、社会調査の対象とされました。当時、日本の中で朝鮮人が最も多く居住していた大阪での調査データは、現在に至るまで多くの調査研究に引用されています。地域史の中で在日朝鮮人をどのように記述するのかという課題は、地域住民をどのように捉えるのか、という点と向き合う必要があります。日本各地で歴史を築いてきたコリアンを「在日コリアン」と表記することの適切性は、これから論じる対象になるのではないでしょうか。ナショナルレベルとは別に、ローカルレベルでの検討という観点から在日コリアンを考えることも、複数性を考察することに繋がります。

３．次世代に向けた関係の創造へ：父の物語と母の物語は接合できるのか

在日コリアンの存在は、これまで多様であったし、現在さらに多様化しています。一方、在日コリアンの中でも社会的発言をできる立場に立てる人は限られてきました。中心にいたのは、やはり男性でしたし、今もそうでしょう。私が生活史調査をしてきた経験から振り返ると、語り手は大概、お父さんベースで語ります。国籍、本籍地、家族史、親戚関係などがそうです。「お母さんはどの地域出身ですか」と聞いても、語り手は知らない場合が珍しくありません。生活に関わっている人間は多様であるはずです。

例えば、父親が在日コリアンで母親が日本人である場合と、父親が日本人で母親が在日コリアンである場合、子ども世代は、民族運動組織の中でどう位置づけられたのでしょうか。今の時代は、こういった文化的な制約を乗り越える、SNS のようなメディアツールもたくさんあり、時代も社会も生育環境も様々であることを個々人が発信する選択肢が増えているがゆえに、従来とは異なる在日言説が複数生まれているでしょう。定型化されてきた「在日コリアン」言説は、ジェンダーの問題にも大きく関わっています。もちろん、この観点は、日本人を語る上でも同様にあります。

複雑性への観点は、こうして羅列しただけでもいくつも見出すことができます。複雑であることは今始まったのではなく、改めて在日コリアンの歴史を振り返ると、植民地期からすでにミックス・ルーツの人びとは多様に存在してきたのであって、加えて時を重ねる中でさらに存在の複雑さが制度、意識、関係などの中で蓄積されてきました。こうした人びとはそれぞれの「境界」をどのように生きてこられたのか、改めて知りたいと思うようになりました。「境界」の多様性を踏まえると、「在日コリアンが消える」説は再検討する必要があるでしょう。最も問題となる「境界」は何なのかを突き詰めるのではなく、テーマに係る「境界」を可能な限り洗い出し、いかなる葛藤が生じて来たのか、また生じているのかを議論するというかなり面倒な作業が必要ではないでしょうか。

在日コリアンが多様化する現在、本シンポジウムに登壇された３名の方々が、それぞれの複雑さについて、どのように気づき、捉え、自分なりに解釈したのか、さらに自分達に関わる次世代へ伝えるとすれば、それは何なのか、教えていただければと思います。

参考文献

伊地知紀子「大阪地域史研究と在日朝鮮人―「在阪朝鮮人史」を「住民史」に接続する」『ヒストリア』300 号、p271―291、2023。
呉世宗『沖縄と朝鮮のはざまで――朝鮮人の〈可視化/不可視化〉をめぐる歴史と語り』明石書店、2019。
石純姫『朝鮮人とアイヌ民族の歴史的つながり』寿郎社、2017。

문 양 숙

국립국악관현악단 가야금 수석

문양숙은 일본에서 태어나, 1998 년 1 월 국립국악관현악단에 연수단원으로 입단한 후 그해 7 월 정식 단원으로 채용되었다. 2012 년부터 현재까지 가야금 수석 단원으로 재직 중이다.

일본 거주 중 통신교육을 통해 평양음악무용대학 전문부 과정을 이수하고 북한 가야금을 습득하였으며, 이후 중앙대학교 한국음악과에 입학하여 학사 및 석사 학위를 취득하였다.

주요 협연 이력으로는 국립국악원 창작악단, KBS 국악관현악단, 성남시립국악단, 경기시나위오케스트라, 강원도립국악관현악단, 청주시립국악단, 연정국악원, 부산시립국악관현악단, 전북도립국악관현악단, 광주시립국악관현악단, National Chinese Orchestra Taiwan, The Orchestra ASIA Japan 등 국내외 유수 악단들과의협연이 있으며, '말하는 가야금', 'Beyond', '현의 여정' 등 다양한 독주회를 서울, 부산, LA 등지에서 개최하였다.

2016 년에는 UN 참전용사를 기리는 평화음악회를 위해 '문양숙가야금 앙상블'을 창단하여 음악감독으로 매년 참여하고 있다.

교육 분야에서는 영남대학교와 목원대학교에서 겸임교수를 역임하였고, 중앙대학교, 한국예술종합학교, 이화여자대학교에서 강사로 후학을 지도하였다. 현재는 서울대학교와 동국대학교에 출강 중이다.

수상 경력으로는 2013 년 국립중앙극장에서 문화체육관광부 장관 표창을 수상한 바 있다.

현재 국립국악관현악단 가야금 수석으로 재직하고 있다.

文 良 淑（ムン ヤン スク）

国立国楽管弦楽団カヤグム首席奏者。

日本生まれ。1998年1月に国立国楽管弦楽団に研修団員として入団し、同年7月に正式団員として採用される。2012年より現在まで、カヤグム首席奏者を務めている。

日本在住中に通信教育を通じて平壌音楽舞踊大学専門部課程を修了し、北朝鮮のカヤグムを習得。その後、中央大学校韓国音楽科に進学し、学士および修士号を取得。

主な共演歴としては、国立国楽院創作楽団、KBS国楽管弦楽団、城南市立国楽団、京畿シナウィオーケストラ、江原道立国楽管弦楽団、清州市立国楽団、ヨンジョン国楽院、釜山市立国楽管弦楽団、全北道立国楽管弦楽団、光州市立国楽管弦楽団、台湾国立中国楽団（National Chinese Orchestra Taiwan）、The Orchestra ASIA Japanなど、国内外の有数の楽団との共演がある。また、「語るカヤグム」、「Beyond」、「弦の旅路」などの独奏会をソウル、釜山、ロサンゼルスなどで開催。

2016年には、国連参戦勇士を称える平和音楽会のために「ムン・ヤンスク伽耶琴アンサンブル」を創設し、音楽監督として毎年出演している。

教育分野では、嶺南大学校および牧園大学校で兼任教授を務め、中央大学校、韓国芸術総合学校、梨花女子大学校では講師として後進の指導にあたってきた。現在はソウル大学校および東国大学校に出講中。

2013年には国立中央劇場において文化体育観光部長官表彰を受賞。

現在、国立国楽管弦楽団のカヤグム首席奏者として活動中。

映画監督　全辰隆(チョン・ジニュン)

秋田県秋田市出身、在日韓国人3世 1989年12月21日生まれ
ソウル国立大学 (Seoul National University, Korea) スペイン語文学部 卒業
韓国芸術総合学校 (Korea National University of Arts, Korea) 専門社(修士課程)映画科 演出専攻 卒業

高校生の頃に韓国語を学ぼうと韓国映画を見ているうちに映画を好きになる。
秋田高校を卒業後、韓国語と韓国の文化を学ぶため渡韓。
その後ソウル大学に進学、自ら映画を作りたいと思い、在学中に映画サークルに加入し映画制作を始める。
本格的に映画制作を学ぶため、韓国芸術総合学校へ進学し映画演出を専攻する。
韓国ソウルで14年間生活し、2022年から東京在住。

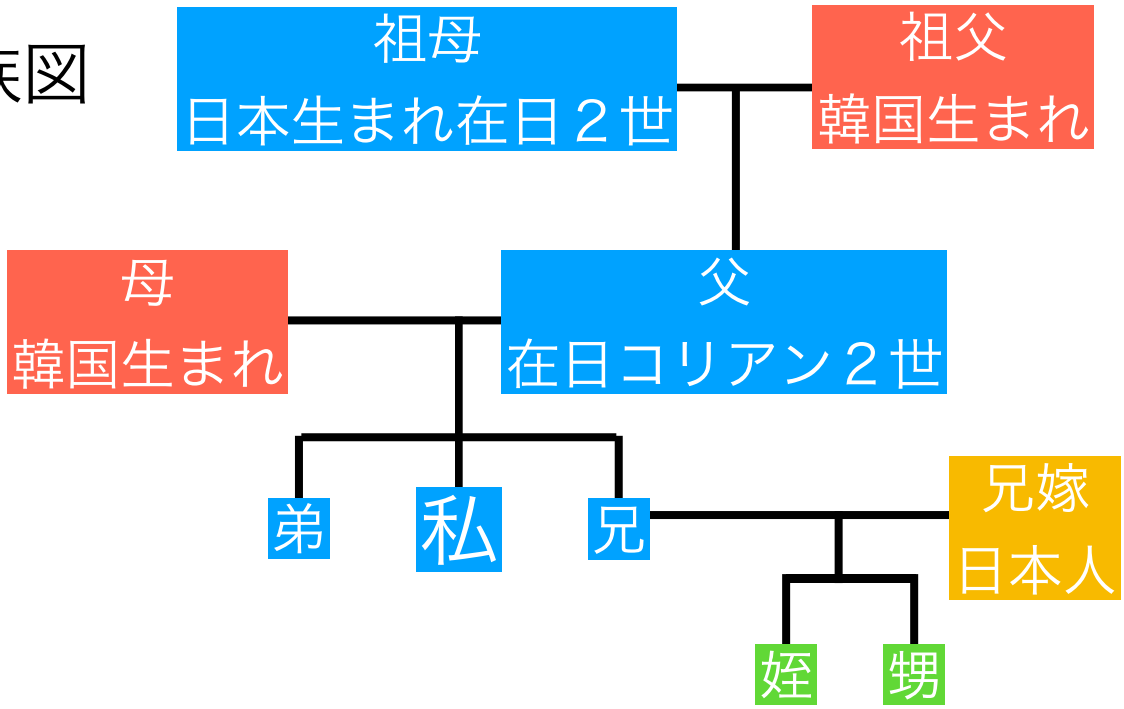
代表作
・ 短編映画 “国道7号線”(30分/2024) 脚本/演出/編集
・ 短編映画 “ミヌとりえ”(26分/2022) 脚本/演出
・ 短編映画 “客観的恋愛談"(21分/2020), 脚本/演出
・ 短編映画 “韓国式” (10分/2018), 脚色/演出

短編映画「客観的恋愛談」(2020, 21分)

期待を抱き韓国にやってきた在日韓国人の青年。
言葉や文化の壁にぶつかり、自身のアイデンティティについて悩み始める。
それでも彼は恋愛を通して自分自身を見つけ出す。

短編映画「客観的恋愛談」(2020, 21分)

限定公開リンク

https://youtu.be/qZ0vghFHlag

私の家族図